

# 「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくり

斑鳩町立斑鳩中学校	教諭 玉越 雄介 Tamakoshi Yusuke	指導主事 徳富智香子 Tokutomi Chikako
田原本町立田原本中学校	教諭 野村 裕子 Nomura Yuko	指導主事 陀安 龍也 Tayasu Tatsuya
県立榛生昇陽高等学校	教諭 富田 晋吾 Tomita Shingo	指導主事 大西 誠 Onishi Makoto
大和郡山市立郡山北小学校	教諭 堀口 拓人 Horiguchi Takuto	指導主事 真井 克子 Sanai Katsuko
県立青翔中学校	教諭 今井 啓文 Imai Hirohumi	指導主事 嶋田 恵司 Shimada Keiji
大和高田市立陵西小学校	教諭 松田 敦志 Matsuda Atsushi	指導主事 岩田 幸久 Iwata Yukihisa
香芝市立鎌田小学校	教諭 藤岡 成暢 Fujioka Shigenobu	

研究開発部長 藤本教子 Fujimoto Kyoko	教科教育係長 山本 剛 Yamamoto Takeshi	I C T教育係長 金子博和 Kaneko Hirokazu
-------------------------------	---------------------------------	-----------------------------------

## 要 旨

本研究は、平成28年度、29年度全教連（全国教育研究所連盟）課題研究の一環として取り組んだ、授業実践に基づく研究である。1年目である本年度は「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりについて、特に「深い学び」に着目して授業改善に取り組んだ。育てたい力を踏まえ、授業の目標を明確に意識して授業を設計することが、児童生徒の学びの深まりにつながることを示唆された。

キーワード： 深い学び 育てたい力 単元計画 見通し 目標を示す 振り返る

## I 研究概要

### 1 はじめに

平成26年秋の中央教育審議会（以下「中教審」という。）に対する「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」と題した文部科学大臣による諮問以来、初等中等教育において「アクティブ・ラーニング」という言葉は急速な広がりを見せた。「アクティブ・ラーニング」をテーマとする研究会が各地で開催され、書籍も数多く出版されている。これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって学び続けていくことのできる子供たちを育てたい

という、教育に携わる者の熱意を感じる場所である。

その一方で、「アクティブ・ラーニング」という言葉が、狭い意味での授業の方法や技術を指すものから、これからの時代に必要な資質・能力の育成を目指した授業の質的改善を指すものまで様々に用いられ、学校で研修等を進める際に話が噛み合わないという声を耳にすることもある。

教員の資質向上を目指し教員研修をサポートする機関として、当研究所において、今求められている「アクティブ・ラーニング」がどのようなものであるかを分かり易く示し、県内各学校の授業改善を推進することは喫緊の課題である。

平成 28 年 12 月 21 日、中教審は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」という。）を取りまとめ、学習指導要領の改善の方向性の一つの柱として「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の視点）を掲げ、「アクティブ・ラーニング」を、「子供たちの『主体的・対話的で深い学び』を実現するために共有すべき授業改善の視点」と位置付けた。

これまでに当研究所では、本県の教育課題の一つである「学習意欲の向上」に向けて、授業づくりに関する研究を進めてきた。特に「主体的・対話的な学び」という視点からの授業づくりに関しては、「協働型・双方向型の授業づくり～言語活動の充実、ICTの活用～」(平成 26 年度)、「児童生徒の学ぶ意欲を高める授業の工夫～共に学び合う活動の充実から～」(平成 25 年度)等のプロジェクト研究に取り組んできたところである。これらの研究においては、協働的な学びを意図的・計画的に授業に取り入れることが主体的に学ぶ力の育成に有効であることを明らかにしたが、研究目的が「学習意欲の向上」であったことから、意欲が向上したかどうかの確認、検証に終わり、「学びの深まり」については十分言及してこなかった。

そこで、平成 28 年度、29 年度においては、特に「深い学び」に焦点を当て、各教科等で付けたい力を明確にしたうえで、そのねらいを達成するための「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりの研究を進めることにした。

本プロジェクト研究では、子供たちが「主体的・対話的で深い学び」を通して、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることを目指す授業を「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業と呼ぶ。そして、単元や題材のまとまりの中で、子供に身に付けさせたい力を見据え、どうすれば「主体的・対話的で深い学び」となるのかを考えながら、適切な学習活動等を工夫し、改善していく授業づくりの営みを「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりと捉えることとする。

以下の第 1 章から第 6 章は、当研究所が重点課題とする「言語活動の充実」、「理数教育の推進」、「ICT活用」の 3 分野で、それぞれの研究員が「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりに取り組み、各教科の学習における学びの深まりについて研究したものである。7 名の研究員による取組は、それぞれに切り口は違うが、子供に身に付けさせたい力を教員が意識して授業改善を進めることで「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指したものであり、その研究成果は、県内各学校における「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりの一助となるものであると考える。

なお、本プロジェクト研究は当研究所が「平成 28 年度、29 年度全教連課題研究」として指定を受けた「ねらいを達成するための『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業づくりに関する研究」の一環として行うものである。この課題研究は「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業づくりを支援するツールや実践事例集等、広く活用できる研修資料を開発することを目指

しており、本プロジェクト研究における授業実践や研究成果を、これらの研修資料に反映させたいと考えている。

## 2 「アクティブ・ラーニング」の視点と本県の課題

「アクティブ・ラーニング」について、合田（2016）は「初等中等教育や大学教育といった垣根を越えて重要となる学習の本質を示すものである」と述べ、溝上（2016）も「小学校から大学までの全学校教育のパラダイムを転換させる、巨大な思想を含み込んだ学習論である」と述べている。これらに共通するのは、学習者の学びと成長から学習を考えるという点である。

答申では、「教員が何を教えるか」という観点からではなく、「学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて『何ができるようになるのか』という観点から、育成を目指す資質・能力を整理する」と述べられている。その上で、必要な資質・能力を育成するために、「何を学ぶか」ということと共に、「どのように学ぶか」を考えることの重要性が説かれている。

学習者の視点から学びを考えることは、従来から重視されてきたことではあるが、教員は、子供が何をどう学び、その学びによってどう変わる（成長する）のかということ、より一層意識して授業を組み立てていくことが求められる。

「どのように学ぶか」ということに関し、答申は「『主体的・対話的で深い学び』を実現するために共有すべき授業改善の視点」として「アクティブ・ラーニング」を位置付けたが、「主体的・対話的で深い学び」の具体的な内容については、次のように整理している。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

①から③の各文は、全て文頭に「子供が」と補うことができる。「主体的・対話的で深い学び」をするのは子供であり、①から③のそれぞれ具体の動きの主語は子供である。しかし、子供がそうなるように仕掛けていくのは教員であり、「主体的・対話的で深い学び」が実現されるためには、教員自身が子供に付けたい力を明確に意識し、単元や題材のまとまりを通して、習得・活用・探究という子供の学びの過程を見通し、授業を計画、設計していくことが求められる。

しかしながら、本県では、全国的な調査等の結果から見ると、この、教員自身が「学びの過程を見通す」、「授業のねらいを意識する」という点において、十分に行われているとは言い難い現状がある。

表1は、平成28年度全国学力・学習状況調査の学校質問紙から、学びの過程の見通しやねらいの意識化に関連した質問項目を取り上げ、いずれも「よく行った」と回答した学校の割合を示したものである。いずれの項目も、小学校、中学校ともに本県の「よく行った」学校の割合は、全

国平均を下回っている。

表 1 平成 28 年度全国学力学習状況調査の学校質問紙より

質問 番号	質問事項	小学校		中学校	
		奈良県	全国平均	奈良県	全国平均
35	習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の工夫改善をしましたか	16.3	21.7	9.5	19.8
36	授業の中で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れましたか	53.0	70.9	22.9	60.9
37	授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか	32.2	50.1	20.0	40.0
38	各教科の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか	23.3	29.2	12.4	25.1

（数字は「よく行った」と回答した学校の割合（%））

『平成 28 年度全国学力・学習状況調査 報告書』では、質問番号 35 について、「よく行った」学校集団は「あまり行っていない」「全く行っていない」学校集団より、教科（国語、算数・数学各 A・B）の正答率が 2.6～4.9 ポイント高く、「よく行った」学校集団と「どちらかといえば行った」学校集団を比較しても、「よく行った」学校集団のほうが 1.4～2.9 ポイント正答率が高いことが報告されている。「よく行った」という回答は、「どちらかといえばよく行った」と比較して、日ごろからそのことを意識して行っている状態であると考えられ、正答率の差は教員が意識的に取り組むことの重要性を示唆すると思われる。

本県では、「どちらかといえば行った」と回答される傾向が強い。この背景の一つとして、従来、「何を教えるか」「どれだけ教えるか」ということに意識が集中しがちであったことがあげられる。また、授業に様々な活動を取り入れようとする際にも、子供に活動させること自体が目的となり、授業全体を見通して「子供にどのような力を身に付けさせたいのか」、「各活動は何を目指して、何のために行うのか」ということが意識されにくい状況があると推察される。

### 3 本年度の取組

中教審での審議資料「アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の育成との関係について－特に「深い学び」を実現する観点から－」には「教育委員会等は学校現場から、理念だけではなく、具体的な実践例を求められているところでもある。こうした実践例については、様々な型や方法の種類を紹介するのではなく、アクティブ・ラーニングの視点に基づきどのように授業が改善され、子供たちのどのような変容（学習内容の深い理解や資質・能力の獲得、学習への動機づけ等）につながったかという、授業改善に関する実践例の蓄積と普及がなされるべきである」と述べられており、本研究の課題意識をまさに言い当てている。

学びの深まりに焦点を当てたとき、まず、どうすれば学びが深まるのか、また、学びが深まるとはどういうことかという疑問が生じる。前者は、どのように授業を改善するのかということにつながり、後者は、子供の変容をどう見取るのかということにつながる。子供の変容を見取るためには、どのような力を身に付けさせたいのか、その授業で何を指すのかということを確認する必要がある。本年度の取組としては、先に述べた授業づくりにおける本県の課題を鑑み、「見

通す」「目標を示す」「振り返る」等を鍵として「深い学び」へのアプローチを考え、図1のように、授業づくり全体を通じて、見通しをもつということを意識して取り組んだ。

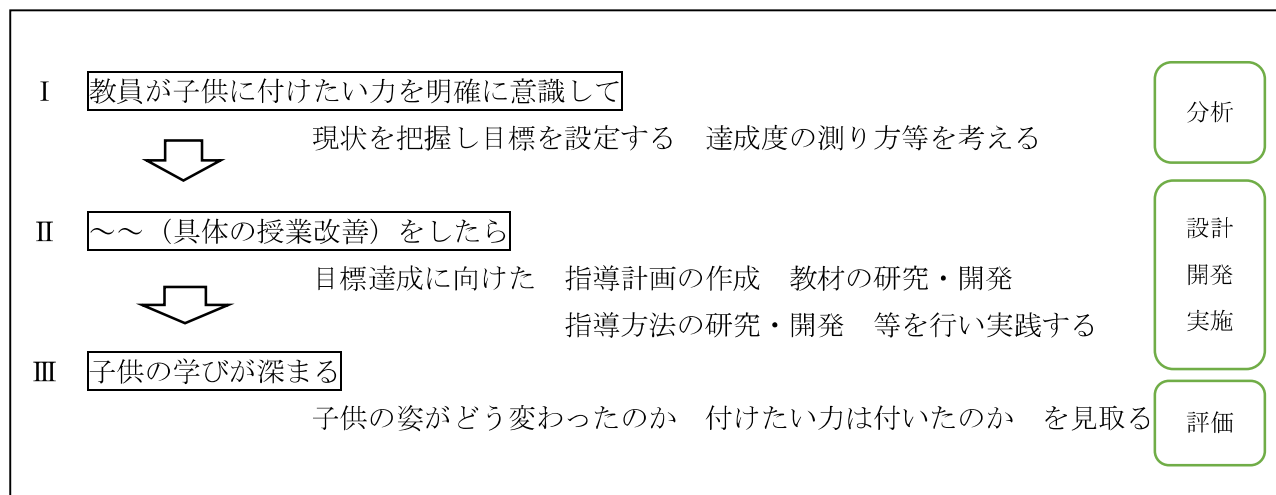


図1 授業づくりにおける「深い学び」へのアプローチ

インストラクショナルデザインの考え方を参考にすると（注）、Ⅰは「分析」、Ⅱは「設計」「開発」「実施」、Ⅲは「評価」ということになる。授業づくりに関する研究では、Ⅱの内容が中心となることが多いが、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲが一体となって授業づくりであることは言うまでもない。

「アクティブ・ラーニング」の視点は、子供たちが「どのように学ぶか」を考えるものであるが、Ⅱにおける具体的方法ばかりが注目され、その目的や、個々の目標が意識されなければ、授業全体の見通しがぼやけてしまう。

そこで、本年度は特に図中のⅠに注目して取り組んだ。子供に付けたい力を教員が明確に意識するためには、現状を把握することが不可欠である。子供の実態（今の姿）を把握・分析してこそ適切な目標設定（どのような姿を目指すか）が可能となる。また、その目標が達成できたかどうかを評価する（子供の変容を見取る）方法も考えておく必要がある。これが図中Ⅲの評価につながる。この「分析」から「評価」にいたる一連の流れは、「子供の学び」を対象とするものであり、同時に、自らの授業に対するメタ認知に通じる。たとえば、Ⅲの「評価」は子供の姿の変容を捉え、検証することであると同時に、自らの授業が、目標を達成したかどうかの検証でもある。

本年度においては、校種、教科の異なる研究員が、それぞれにⅡにおける具体の工夫・改善はもちろん、Ⅰにおける現状把握の方法や、Ⅲの見取りの方法についても模索、試行した。研究過程においては、自身が見通しをもって授業づくりを進めるためのプランニングシート等を作成したものもある。教科学習のねらいを達成するという観点ではそれぞれ目標も異なり、子供の変容の見取りも異なるが、授業づくりの考え方や、そこで用いられた各手法等には、校種や教科を越えた汎用性をもつものが多く含まれている。今後は本年度におけるそれぞれの成果を踏まえて、授業づくりを支援する研修資料やより汎用性の高い支援ツールの開発につなげたいと考えている。

（注）鈴木（2005）は、インストラクショナル・デザイン（以下「ID」という。）とは「教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスのこと」と説明している。様々なIDモデルが提案されているが、代表的なものの一つとして、分析、設計、開発、実施、評価の5段階を必要に応じて繰り返すことでより

良いものができるとするADDIEモデル（5段階の頭文字を取ったIDプロセスの一般形）を挙げることができる。

#### 4 各章の概略

分野	教科	要 旨	キーワード	
言語活動の充実	中学校国語	中学校国語科において、育成したい資質・能力の明確化と深い学びの過程の実現を研究の重点として授業実践を行った。「単元の見通しと振り返り」「適切な課題の設定」「目的を明確にした交流」「生徒自身が課題解決・課題探究する言語活動」を意識して授業した結果、生徒の学びが変容した。また、評価に生かすために、ワークシート等の具体物を工夫したことは、生徒に付けさせたい力が身に付いたかを見取るために有効であった。	育成したい資質・能力 主体的・対話的で深い学び 見通しと振り返り 交流目的 課題を解決・探究する言語活動	第1章
	中学校英語	中学校英語科の学習において、創造的なコミュニケーション活動を意識した授業実践を行った。生徒が能動的に英語を使おうとする態度の育成を目指し、見通しをもたせることを意識した授業づくりと、生徒が既習事項を活用しながら取り組める言語活動の工夫を行った。その結果、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現することにつながり、主体的・対話的で深い学びの実現に効果があった。	創造的なコミュニケーション活動 育成したい資質・能力 見通しと振り返り 4技能の統合的な活用 主体的・対話的で深い学び	第2章
	高等学校地歴	自分と社会とのつながりを明らかにするような「歴史的事象を多面的・多角的に考察する力」を身に付けさせることを目指して、「歴史的事象の類似や差異、因果関係に着目した、課題を追究したり解決したりする主体的・対話的な活動を取り入れた授業展開」を工夫し、生徒の変容を検証した。ペアワークやグループワークなどを導入した授業事例を重ねた結果、生徒の「歴史的事象を多面的・多角的に考察する力」が高まった。	類似や差異、因果関係 主体的・対話的な活動 自分と社会とのつながり 多面的・多角的に考察する力	第3章
理数教育の推進	小学校理科	教員が単元を見通して、探究の過程における、仮説を立てたり考察したりする学習過程を中心に、その観察・実験に適した学習過程を充実させることが深い学びにつながり、問題解決の能力が育成され则认为、アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりに取り組んだ。探究の過程を充実させることは、深い学びにつながる事が確認されたと考える。	深い学び 探究の過程の重点 観察・実験 アクティブ・ラーニングシート	第4章

理 数 教 育 の 推 進	中 学 校 数 学	「アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくり」を進めることを通して、数学への好意性や有用性を高める様々な取組を行った。また、その効果を調べるために、取組前と取組後に複数回の授業の振り返りや学習意識調査等を行い、その効果を検証した。その結果、アクティブ・ラーニング自己評価や数学の学習意識は向上し、アクティブ・ラーニングの視点からの授業づくりの有効性が示された。	アクティブ・ラーニング モチベーション 授業づくり 自己評価 ループリック	第 5 章
I C T 活 用	小 学 校 算 数	「主体的・対話的で深い学び」を実現するための効果的なICT活用について小学校算数科を通して研究を行った。実践記録を分析した結果、単元計画の中でねらいを明確にし、見通しをもってICTを活用することにより、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために効果的であることが分かった。	単元計画 ねらい 見通し ICTの活用	第 6 章

### 参考・引用文献

- (1) 中教審(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
- (2) 合田哲雄(2016)「今、なぜ「アクティブ・ラーニング」か」『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社 p. 27
- (3) 溝上慎一(2016)『アクティブラーニング・シリーズ(全7巻)』東信堂 p. ii
- (4) 国立教育政策研究所(2016)『平成28年度全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査』
- (5) 中教審(2016)「アクティブ・ラーニングの視点と資質・能力の育成との関係についてー特に「深い学び」を実現する観点からー」平成28年3月14日総則・評価特別部会資料1-1 p. 1
- (6) 全国専門学校教育研究会(2015)「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進 平成26年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成研修モデルの開発・実証 「インストラクショナルデザインおよびアクティブラーニングを使いこなす教員養成研修モデルの開発実証」  
<http://www.zsenken.or.jp/monka-itaku.id-and-al/>
- (7) 鈴木克明(2005)「e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン」『日本教育工学会論文誌』第29巻第3号